

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22760485

研究課題名（和文） 都市形成の諸相 近世・京都・上京

研究課題名（英文） VARIOUS ASPECTS OF URBAN FORMATION IN KAMIGYO OF EDO PERIOD

研究代表者

早見 洋平 (HAYAMI YOHEI)

信州大学・工学部・准教授

研究者番号：90362102

研究成果の概要（和文）：近世京都の都市形成を理解するために、「洛中絵図」が描いていた門と木戸に着目した。以下を確認した。門は、天皇関連施設と少数の寺社に描かれていたが、武家や公家には描かれていなかった。木戸は、寺町・寺之内・聚楽第周辺など、天正後半期に都市的な改造が加えられた地域の通りに描かれていた。街区の中程に描かれた木戸は、辻以外の場所に設けられた町境界と考えられる。その設置理由として、町共同体の移転や段階的な都市形成の結果が想定できる。

研究成果の概要（英文）：This research surveyed the gates of the grounds and the gates of the streets [*Kido*] that had drawn in "*Rakuchu-ezu* (1637)", to examine the urban formation in *Kamigyo* of Edo period. The Emperor related facilities and temples and shrines of minority had the gates of the grounds, but court nobles and samurais were not drawn. The gates of the streets were drawn on streets of the around the ruins of *Jyurakudai*, *Teramachi* and *Teranouchi* areas that were modified at the end of 16th century. The gates of the streets that were drawn in the middle of the city blocks, they are town boundaries, which were provided in a location other than the intersection. As a result of the move of the communities or the gradual city formation, they are thought that it was set up.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1700,000	510,000	2,210,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：都市史

## 1. 研究開始当初の背景

京都は、古代計画都市に端を発し、いまなお大都市として存続する、日本を代表する歴史的都市である。その近世初頭は、大規模な都市改造と人口増を経験し、近現代の京都の骨格をかたちづかった転換期として、都市形

成史上きわめて意義が大きい。申請者は、京都における都市的な構築物（建物や塀や溝など）の捕捉を試みる過程で、京都のなかでもとりわけ上京における街区や溝や町境や町名などの特異性に気が付いた。

上京は、平安京の内外にまたがり、古代か

ら継続する市街地とそうでない土地が含まれるばかりでなく、数々の戦乱による荒廃と復興、近世初頭以降の開発など、市街地形成の契機は一様でなく、形成過程が異なる場所が層状に重なって現代にいたったと考えられる。上京の形成を微視的・具体的に解明することは、京都の変容過程自体を解明するに等しい。このとき、本研究課題は、都市形成について、町境界線と隣地境界線の設定を指標とする。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近世初頭における都市形成過程を具体的・微視的・建築的スケールで検討することにある。とりわけ、都市形成に関わる多様なエポック（西陣・北野・相国寺・上京放火・聚楽第など）に富む、京都・上京を対象とする。検地、間尺改、家屋敷売買といった、都市不動産に関わる文献史料を駆使し、町境界線と隣地境界線の形態と生成過程を考察する。

(1) 上京は、古代・平安京の外にまたがり、多くの公家・武家が立地した場所あったとともに、北野や相国寺といった宗教勢力の拠点でもあり、西陣のような手工業者の町でもあるなど、日本を代表する伝統的都市・京都の、さらにその縮図ともいえる。都市形態に着目するならば、一部は条坊制の範囲内であり、一部は多くの辻子を含みもつ変則的な街路からなる。都市形成に着目すれば、上京放火からの復興、聚楽第の建設と破壊、北野社の門前の開発、寺の内の建設など、都市域の形成と拡張はさまざまな契機からなる。比較的限定された地域において、これほど多様な要素と多様な契機からなる都市形成を把握できるのは、京都・上京において他にない。

(2) 既往の研究において、戦国期の検地・近世前期の間尺改・家屋敷売買といった都市不動産に関わる文献史料が記録した事柄は、2次元的な土地区画として考察され、3次元的な都市空間や建築構造との関連を欠いていた。本研究課題では、遺構のほか、絵画史料等を駆使して3次元の〈物〉の抽出と復原を目指す。

## 3. 研究の方法

本研究課題は、第一に、都市不動産に関わる文献史料を収集・整理する。第二に、収集した史料にもとづき、当該期の家や屋敷の形態や規模を復原する。第三に、その記載内容・取り引き条件を検討することにより、都市不動産の形態とその取引実態を明らかにする。この3段階の作業と考察を通じて、上京にみられるさまざまな都市形成過程を捉える。

(1) 隣地境界線の形態、構築物（建物や塀など）の配置の復元的研究

当該期の微視的な都市景観の復原をおこなう。これにより、数量や文字からなる史料が、形態や物として、建築学的な考察の対象となる。そして、屏風絵や実測絵図、明治初頭の絵図面などと通時的な形態の比較が可能となる。

## (2) 町域・町境の取り扱いに関する研究

前項(1)により、土地区画の形態や町域における位置が判明している。そこで、都市不動産としての形態や奥行寸法の表記形式を、年代や場所と関連づける考察をおこなう。記載の〈型式〉的な差異にも注目し、物件の位置や規模といった属性との関係性を探る。

## (3) 都市形成期における都市不動産の萌芽的状況に関する研究

本研究課題の核心をなす。都市形成過程において、都市不動産が事後的に形成されていくことがあつたらう。本研究課題は、近世初頭・京都という、激しい人口増と都市膨張の時代のなかで、たんなる居住地（建物と土地）が、都市不動産として再定義されていく、その初期の姿を、多様な都市形成の諸段階を含む上京において捕捉する。

## 4. 研究成果

### (1) 問題の所在

「洛中絵図」は、近世初期の京都に関する実測地図である。寛永12年(1635)から同14年(1637)7月2日にかけて制作されたといわれる宮内庁書陵部蔵『寛永拾四年丑 洛中絵図』と、<sup>(注1)</sup> 寛永19年(1642)に制作されたといわれる京都大学蔵『寛永後万治前洛中絵図』が知られている。<sup>(注2)</sup> その相違点は数多く指摘されるが、酷似しているがゆえに浮かび上がる差異ともいえる。前者が後の清書に備えた下絵であり、後者が前者を「基礎資料」としつつ、経年変化を「補正作図」して清書と同等に仕上げられた控えとされるなど、その制作過程に関連性が指摘されており、<sup>(注3)</sup> 両者の酷似は偶然ではない。ともに、一定の縮尺で街区形状を描き、「御公家衆」「御大名衆」「いしや衆・後藤衆・本阿弥衆・検校衆」「諸寺」や町の名前、街区の寸法・通りの幅員、「町」「町屋」「藪」「野島」「山林」などの土地利用状況が書き込まれたほか、2個を1組とする黒点が記載されていた。この黒点は門柱の抽象表現である。

以下では、わずかとはいえ制作年代が遡る『寛永拾四年丑 洛中絵図』を題材として、この黒点を検討する。同図には2個を1組とする黒点が98か所、記載されていた。98か所のうちの29か所では、2個の点が通りに沿って並び、通りとの関係からみて、この黒点は敷地を囲う塀に開かれた門を意味している。残りの69か所では2個の点が通りを挟んで並び、通りとの関係からみて、この黒点は町の境の木戸を意味している。実際、69か

所のうちの50か所は、辻（交差点）付近か、「町屋」あるいは「町」と画された範囲の端部に位置しており、木戸については町境をなす構築物であると位置づけた既往研究と合致する。残る19か所の木戸は街区の中程に位置しているが、同様に、町境である可能性がある。（表1）

寛永期の洛中では、このように門が29か所と町の木戸が69か所だけあったと理解してよいのか。研究史は、辻ごとに設置された木戸を示唆している。<sup>(注4)</sup>にもかかわらず、「洛中絵図」は描いていない。門も同様に、同図の表現で「四百五拾七間」におよぶ寺院や、同じく「百六拾九間」の公家や「百三拾六間」の武家が立地した洛中において、門が29か所しかなかったとは考えにくい。したがって、あまねく存在した門あるいは木戸のうちで特定のものだけが記載されたに違いない。

ここで、「洛中絵図」が用いていた省略法に触れておく。土地利用状況として「町」あるいは「町屋」が書き込まれた部分は、一つの街区内で寺院や公家など「町」以外の土地と隣接している。何も書き込まれていない街区は、寺院でも公家でも藪でもなく、通りには町名が記されている「町」である。すなわち、街区全体が「町」の場合には「町」の書き込みを省略し、紛らわしい場合のみ明記するという、合理的な編集方針がうかがわれる。29か所の門と69か所の木戸には、記載省略を免れた理由があるのではないか。

以下では、「洛中絵図」に記された門ないし木戸の偏在に着目し、近世初頭の都市形成過程における木戸の分布の意味を解釈するとともに、「洛中絵図」がこの姿を記載した意図を検討する。

表1 「洛中絵図」が描いた門と木戸

門または木戸 98か所		
門 (①-⑬番) 29か所	木戸 69か所	
	辻または町域の端部 (1-50番) 50か所	街区の中央部 (A-S番) 19か所

(2) 門ないし木戸の分布とその詳細

「洛中絵図」全体の門ないし木戸の分布を図1に示す。2個の黒点（:）はそれが並ぶ方向と対応した1本線（|）で示し、29か所の門は施設単位で①から⑬とした。また、69か所の木戸の立地場所について表1に示す。町域の端部を画したと考えられる50か所は、おおよそ西側から通し番号を振り、1から50とした。街区の中程に位置する19か所は、AからSとした。

有力な寺社や公家が洛中北部、すなわち上京に集まっていたこともあって、過半の門が上京に描かれていた。木戸も、ほとんどが上京に描かれていた。しかしさらに子細にみれば、上京のなかでも地域的にも偏りがあり、



図1 寛永14年「洛中絵図」における門および木戸

門は「禁中御位様」周辺に集中し、木戸は寺町通や新町通など特定の通りの一部に集中している。

(2-1) 門の付置

29か所の門は、「禁中御位様①」（6か所）「院御所様②」（5か所）「御国母様御下屋敷③」（3か所）、「紫野今宮⑤」「今宮殿御旅所⑦」「北野⑧」「相国寺⑩」「東御門跡⑬」（以上2か所）、「大徳寺④」「大源庵⑥」「北野養命坊⑨」「浄善寺⑪」「頂妙寺⑫」に附属していた。すなわち、天皇に関係する主要3施設と寺社10施設に限られ、公家や武家には門が描かれていない。

当時の「禁中御位様」は7歳で皇位を継いだ女帝・明正天皇（在位：寛永6年（1629）-同20年（1643））であり、「院御所様」は明正天皇の父で、修学院離宮の造営や寛永3年

(1626)の二条城行幸で知られる後水尾上皇であり、「御国母様」は明正天皇の母で、徳川秀忠の娘でもある東福門院(徳川和子)である。

一方、宗教施設では、市街地の北端に水路で囲まれた広大な大徳寺④があり、「法堂・仏殿・山門」の軸線上に南面して門がある。寛永13年(1636)には法堂の再建と方丈の新築があった。<sup>(注5)</sup>大徳寺④の北側に接する紫野今宮⑤(現・今宮神社)があり、周囲を「林」と水路で囲まれ、通りから林を経て境内へいたる参道の両端2か所に門がある。紫野今宮⑤から「野島」をはさんで東側に大源庵⑥があり、参道の突き当たりに門がある。大徳寺④の東南に今宮神社⑤の例祭時に神輿の安置所となる今宮殿御旅所⑦(現・今宮神社旅所)があり、寛永13年(1636)には勸進能の興行場となったことが知られている。<sup>(注6)</sup>

西側にやや離れて、北野⑧(現・北野天満宮)と、北野養命坊⑨(現・大報恩寺)がある。北野⑧は、西を土居、北を坊群、東・南を築地によって限られ、築地に門が切られている。その位置関係は、現存する東門と楼門に合致する。「野島」と「町屋」に囲まれた北野養命坊⑨の敷地は3地点で接道しているが、南面する「釈迦堂」の正面ではなく東側に門が描かれ、現在も該当する位置に門が閉鎖されている。

洛中の東北部には広大な敷地のほとんどを「町」で囲まれた相国寺⑩があり、複数の接道が確認できるが、「本堂・山門」の正面のみに門が2か所描かれている。天正後半期、秀吉によって寺院が移転・集中させられた寺町通りの東側、その最北の浄善寺⑪(現・上善寺)は、「門前」「町」の奥行分だけ鞍馬口通からセットバックしており、その接道部分に門がある。寛永11年(1634)に本尊の移転があったとの記録がある。<sup>(注7)</sup>同じく天正後半期に院御所様の西隣へ移転した「頂妙寺⑫」にも南面する門がある。唯一の下京では、東本願寺として知られる東御門跡⑬があり、ともに東面する「廣間」と「開山堂」の東側に2か所の門が描かれている。

以上、10件の寺社における門の描写や寛永期の出来事について確認したとおり、敷地規模・立地・宗派・建立や建設の年代・行事の種類に関して、共通事項が判明していない。門が描かれた寺社と門が描かれていない寺社との差異を見出すにはいたらなかった。一方で、門の描写は敷地の内部にたつ山門とは区別されており、街路と敷地との境、すなわち道路境界を明示していた。複数建物の配置や主要建物の方向からみて、軸性・正面性が高い、表参道となりうる接道部分が描写の対象となっていた。

(2-2) 木戸の付置

表2 「洛中絵図」における木戸の立地場所

番号	通	境
1	御前通西裏	大上之町の内
2	不詳	郊外と上形丁
3	天神通	郊外と北町
4	御前通	神明丁と北野北丁
5	御前通	町屋(町名なし)と北野松原
6	御前通	北野松原と町屋(町名なし)
7	御前通	北野松原と上形丁
8	今小路	経堂前今小路丁と采ノ百町
9	六軒町通	北野養命坊の前(町名なし)と釈迦堂東北半町
10	鞍馬口	北区紫野干三坊町(町名なし)と郊外
11	千本通	西五辻北丁と花車丁
12	千本通	作庵丁と西五辻天下丁
13	千本通	西五辻天下丁と風呂庵町
14	千本通	風呂庵町と上善寺前丁
15	寺之内通	新猪熊西丁と新猪熊東丁
16	智慧光院通	伊佐丁と本隆寺前丁
17	五辻通	西五辻東丁と二色殿丁
18	五辻通	二色丁と五辻丁
19	今出川通	般舟院前丁と東淨善寺丁
20	今出川通	東淨善寺丁と北小路中丁
21	今出川通	北小路中丁と西北小路丁
22	一条通	野島と伊勢殿橋丁
23	中立売通	野島と加賀殿丁
24	不詳	大徳寺と大徳寺門前の間の北端
25	不詳	大徳寺と大徳寺門前の間の南端
26	大宮通西裏	若宮北半丁と西若宮南半丁
27	大宮通	安居院中丁と前之町
28	不詳	大徳寺門前と郊外
29	堀川通	瑞光院門前と横丁と畠
30	堀川通	下天神丁と等ノ内立丁
31	新町通	郊外と上清蔵口町
32	新町通	下清蔵口町と大真院丁
33	新町通	大真院丁と道正ノ丁
34	鞍馬口通	郊外とくらま口町
35	鞍馬口通	くらま口町と淨善寺町
36	寺町通	淨善寺町と天寧前丁
37	寺町通	天寧前丁と高德寺前丁
38	寺町通	長福寺前丁と觀善寺前丁
39	寺町通	歡喜寺前丁と阿弥陀寺前丁
40	今出川通	小原口丁と眞如堂・立本寺
41	今出川通	講同ノ内丁と御国母様御下屋敷の前
42	寺町通	しん女堂前町538と正定院前町
43	寺町通	正定院前町と常慶院前町
44	寺町通	中御堂前町542と百万遍前町
45	寺町通	百万遍前町と葦堂ノ前町
46	寺町通	葦堂前ノ町と西方寺前町
47	醒ヶ井通	堀川二丁目と三丁目
48	木津屋橋通	かまのや丁と塩ノ小路通しほノ小路丁
49	油小路通	町名なし(不動堂町)と郊外
50	東洞院通	和泉丁と「是乃六条寺内 巷丁め」
A	寺之内通	新猪熊玄蕃町と新猪熊西丁
B	淨福寺通西裏	西猪熊南半丁と若狭町
C	元覺願寺通	五丁目とかうど丁
D	笹屋町通	三丁目と武丁目
E	廬山寺通	中社丁と東社丁
F	寺之内通北	西長福寺丁と東長福寺丁
G	大宮通西裏	西若宮南半丁と社立上半丁
H	大宮通	直達はし丁と安居院中丁
I	新町通	上清蔵口町と下清蔵口町
J	新町通	道正ノ丁と内藤丁
K	新町通	内藤丁と安樂小路
L	寺町通	高德寺前丁と長福寺前丁
M	寺町通	阿弥陀寺前丁と十念寺前丁
N	寺町通	十念寺前丁と本満寺前丁
O	寺町通	本満寺前丁と立本前丁
P	下立売通	田中丁と籠屋丁
Q	下立売通	籠屋丁と中村丁
R	西洞院通	二条西洞院妙白寺町と押西洞院町
S	釜座通	上松屋町と下松屋町



木戸は、町と町との境にたてられる場合と、「野島」など町以外と町との境にたてられる場合がある。表2に、木戸が遮断している通りと、その木戸の前後の町名や土地利用状況を示す。ここで、4つ以上の木戸が描かれていた通りを掲出するなら、寺町通に13か所、新町通に6か所、今出川通に5か所、千本通・御前通にそれぞれ4か所あり、この5本の通りで全69か所のうちの32か所を占める。

図1より、門が描かれていた地域には、木戸も多く描かれていた。門の描写の有無を寺社の個別的な特徴に求めるのではなく、木戸と一体的に通らないし地域と関連づけてとしてみる。

相国寺⑧から禁中御位様①周辺に門が描かれ、すぐ東側の寺町通に連続して木戸が描かれている。また、大徳寺④周辺に門が描かれ、妙覚寺や妙蓮寺の周囲のいわゆる寺之内に木戸が描かれている。さらに、図2に示すように、北野⑧から聚楽第跡地である「野島」にかけて木戸が多く描かれている。



図2 北野・聚楽跡地周辺

### (2-3) 街区の中程にある木戸

町と町との境にたてられる木戸は、近世京都の両側町では辻に設置される。しかし「洛中絵図」は、辻や町城の端部50か所に対し19か所で街区の中央付近に木戸が描かれていた。以下、木戸A・Bを事例として検討する。

A 新猪熊西丁／新猪熊玄蕃町（現・新猪熊町、寺之内通千本東入）

千本通と寺之内通とが交差する辻の東側、街区のほぼ中央に、木戸Aが描かれていた。

(図2上部参照) 周囲には木戸11・15も見出されるが、これらは辻の近傍にある。木戸

の左右に「新猪熊西丁」「新猪熊玄蕃町」と記されていた一帯は、現代、新猪熊町とよばれている。新猪熊町について大正4年(1915)刊『京都坊目誌』は「開通年月不詳」とするものの、この町が立地する寺之内通について「天正年中 十三年より十八年まで 豊臣秀吉命じて市中に散在せる。寺院を京極 寺町 安居院の旧地等に移転せしむ。」とあり、さらに、明治8年(1875)編纂着手『京都府地誌 京都一』は、「中猪熊町・新猪熊東町・新猪熊町・西熊町 以上、元今ノ猪熊通ニアリシヲ、天正年中豊臣氏聚楽造営ノトキ、其区域ニ系ルヲ以テ、易地トナリ、旧名ヲ存ス。」という。「易地」とは、代替地の意であろう。猪熊通は、聚楽第跡地推定地の東側、大名屋敷地区を南北に通る。すなわち、木戸Aをはさんだ2町は、現地(寺之内通)の街区形状に沿って組織化された町共同体ではなく、旧地(猪熊通)で既成の共同体を保持して移転した町であった。そのために、街区形状と合致しない位置に町境が設けられたと考えられる。

B 西猪熊南半丁／若狭町（現・真倉町、上立売浄福寺半丁西入上ル）

つづいて、木戸Bを検討する。寺之内通と上立売通のあいだ、浄福寺通の一筋西側に木戸Bが描かれている。木戸Bの上下に「西猪熊南半丁」「若狭町」と記されていた一帯は、現在、真倉町とよばれている。木戸Aとの距離的な近さや町名に「猪熊」を含むことから、木戸Aと成立経緯の類似が想定され、既成共同体の移転によって生じた町境であるとの推測が成り立つ。

ここで、「洛中絵図」では木戸A・Bともに木戸の両側にそれぞれ2つの町名が記され、現代、その場所に町名が1つしかない点について、町の合併が思い浮かぶ。合併の存否を検討する。表3は、『慶長昭和京都地図集成』(注8)に収められた20点の都市図のうち、当該地の町名が記載されている絵図13点における、木戸A・Bに相当する場所の町名を抽出したものである。描画手法が酷似しており、既存の絵図を参照していると考えられることから、年代に応じた実際の町名が記されているとは断定できない。それでも、呼称の多様性を確認することはできる。既述の通り、「洛中絵図」にて2つの町名が記されていた場所は、明治9年(1876)の絵図では1つの町名のみが記され、合併があったように見える。しかし、「洛中絵図」を十数年さかのぼる「京都図屏風」(絵図番号[2]、寛永初年:1624)の町名、および「洛中絵図」以降明治初頭までの町名を通覧したとき、事情は異なる。第一に、町名は2つ記載された場合と1つ記載された場合とがある。その都度町の合併や分割が繰り返されていたとは考えにくいことから、2町として位置づける場合の町

名と、それらを一括りにして扱う場合の町名といった、2段階的把握が想定される。すなわち、「町々小名の称号は本名古名一名異名俗名等迄悉記す」との編集方針による『京町鑑』（宝暦12年（1762）成立）が、「〇夕西猪熊北町 〇夕西猪熊町 此両町を又一名〇若狭町とも〇枕町とも〇大蔵町とも云」と書いたように、町名は変遷したばかりでなく併存もしていた。その併存状況は、町名が複数あるというよりも、府-市-区-町と同様にスケールに応じた別階層になっていたとも考えられよう。第二に、町名が指し示している場所が一定していない。たとえば、木戸Aに関して、「玄蕃」を含む町名は、木戸の東西合わせて一体的に用いられた例[2, 14, 15, 16, 17]、東側で用いられた例[4]、西側で用いられた例[10, 13]もあった。木戸Bに関しても、「まくら」を含む町名は、寛永元年[2]と明治9年[17]で一体的な範囲で用いられた以外は、この街区の北側街区にて用いられていた。書き間違いが繰り返し写された可能性はあるものの、書き間違いでないならば、町名と実際の場所あるいは共同体とのつながりは、当該地域に関してルーズであったといえる。すなわち、町名とは、「両側町」の成立後、各町にそれぞれ町名がつけられた

表3 町名の変遷

[絵 図番 号]	木戸A		木戸B			
	年代	西側	東側	寺之内 通北側	北側	南側
[2]	寛永元 (1624)	玄蕃町		-	まくら町	
[4]	寛永14 (1637)	新猪熊 西丁	新猪熊 玄蕃町	西猪熊 北半丁	西猪熊 南半丁	若狭町
[6]	承応3 (1654)	ほそこ丁		まくら 丁	下同	わかさや 丁
[8]	貞享3 (1686)	-		-	下わか さや丁	-
[9]	元禄9 (1696)	しんいのくま 丁		まくら 丁	下同丁	わかさや 丁
[10]	元禄14 (1701)	同玄蕃 丁	同西丁	新猪熊 北丁	西猪熊 南丁	大蔵丁
[11]	宝永6 (1709)	細川丁		枕丁	下同丁	わかさや 丁
[12]	寛保元 (1741)	ほそ川丁		まくら 丁	いかや 丁	-
[13]	天明6 (1786)	同玄蕃 丁	同西丁	新猪熊 北丁	西猪熊 南丁	大蔵丁
[14]	天保2 (1831)	同玄蕃丁		西猪熊 北半丁	同南半 丁	大蔵丁
[15]	慶応4 (1868)	同玄蕃丁		西猪熊 北半丁	同南半 丁	大蔵丁
[16]	明治2 (1869)	同玄蕃丁		西猪熊 北半丁	同南半 丁	大蔵丁
[17]	明治9 (1876)	新猪熊丁		西熊丁		真倉丁

絵図番号：[2]京都図屏風、[4]寛永十四年洛中絵図、[6]新板平安城東西南北町并洛外之図、[8]新撰増補京大絵図、[9]新板平安城并洛外之図 京之図、[10]元禄十四年実測大絵図、[11]新板増補京絵図、[12]増補再板京大絵図、[13]天明六年京都洛中洛外絵図、[14]改正京町絵図細見大成、[15]改正京町御絵図細見大成、[16]京町御絵図、[17]改正京都区分一覧之図

が、町という地域団結が各自町名を称することは町じたいの独自性を主張することによって、町名の発生は「両側町」確立の一つの指標（秋山國三）<sup>（注9）</sup>であることが、妥当しない都市形成があったと想定される。

ふたたび、木戸Bをみる。杉森哲也「町組の発達過程」<sup>（注10）</sup>によって、木戸B北側にあたる「西猪熊南半丁」は、元龜3年（1572）以降天正19年地子免許までの成立、木戸Bの南側にあたる「大蔵町」は、天正20年（1592）以降元和元年（1615）までの成立であることが明らかになっている。表3と合わせて理解すれば、天正19年時点、寺之内通と浄福寺通の一筋西側の通との辻の北側には西猪熊北半丁、南側には西猪熊南半丁が成立済みで、南半丁の南端に位置する木戸Bは、天正19年時点で都市域の末端であった。その後約25年、元和元年までには南半丁の南側にも都市域（若狭町=大蔵町）が展開していった。木戸Bは、都市域の末端を画定していた木戸が、都市域が拡張していく過程で都市域内部に取り残されたものと考えられる。西猪熊北半丁と同南半丁が合併したのではなく、西猪熊南半丁と若狭町（大蔵町）が合併したのは、成立年代の違いに起因したかつての木戸Bよりも、街路や街区を共有することの便宜の高まりがあったと考えられる。

### (3) まとめ

「洛中絵図」には門が描かれていたが、天皇関連施設と少数の寺社に限られ、武家や公家には描かれなかった。

寺町・寺之内・聚楽第周辺など、天正後半期に都市的な改造が加えられた地域の通りに木戸が描かれていた。

町共同体の移転や段階的な都市形成の結果として、辻以外の場所に町境界が設けられる場合があった。

- 注1:宮内庁書陵部編:洛中絵図 寛永拾四年丑七月二日、吉川弘文館、1969  
 注2:京都大学附属図書館蔵・中井家旧蔵:洛中絵図 寛永後万治前、臨川書店、1979  
 注3:川上貢:注2前掲書 解題21頁  
 注4:丸山俊明:京都の町家と町なみ、昭和堂、2007、第8章  
 注5:平凡社編:京都・山城 寺院神社大事典、平凡社、1997、452頁  
 注6:注5前掲書 80頁  
 注7:注5前掲書 355頁  
 注8:大塚隆編:慶長昭和京都地図集成、柏書房、1994  
 注9:秋山國三・仲村研:京都「町」の研究、法政大学出版局、1975、168頁  
 注10:杉森哲也:近世京都の都市と社会、東京大学出版会、2008、第3章

### 5. 主な発表論文等

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

早見 洋平 (HAYAMI YOHEI)

信州大学・工学部・准教授

研究者番号: 90362102